

# 新協同組合物語

第21回

## 東京都農業協同組合中央会と 「江戸東京野菜」

農林中金総合研究所

ふるえしんや  
古江 晋也

1960年代、首都高速道路の開通に象徴される高速道路の拡張や道路整備を受け、農産物の輸送手段もトラックが主流となった。輸送手段の変化は、形質のよい農産物の生産を促す要因となり、一代交配種（いわゆる「F1」）が急速に普及するようになった。

1970年代になると、市街化区域内農地の宅地化が促進されたり、宅地並み課税が導入されたりしたことで東京都区部の農地は急速に減少し、多くの伝統野菜が相次いで姿を消した。

このことに危機感を抱いた東京都農業協同組合中央会（以下、JA 東京中央会）は、1980年代後半からさまざまな活動を通じて、「江戸東京野菜」の復活に力を入れるようになった。

### 伝統野菜を守るため 「できることからしよう」

JA 東京中央会が伝統



写真1 東京都立川市にある JA 東京中央会

野菜の復活に取り組んだきっかけは、1980年代後半に全国各地の農業改良普及所などから伝統野菜の栽培が激減したことを知らされたためである。

そこでまずは「できることからしよう」というスタンスで、東京の伝統野菜の特徴や歴史を整理した『江戸・東京ゆかりの野菜と花』を農山漁村文化協会から出版した。同書の責任編集に携わった大竹道茂氏（現在、江戸東京・伝統野菜研究会代表）は「バブル期で農地が宅地に転換したり、伝統野菜を栽培していた生産者が高齢化したりするなど、記録に残すことはまさに時間との戦いであった」と当時を振り返る。

執筆は、かつての伝統野菜の栽培方法や特徴などを知る農業試験場長や農業普及所長（または経験者）が担当しており、この時の資料が後の江戸東京野菜の復活に向けた活動のバックボーンとなった（JA 東京中央会はその後、1996年に『江戸・東京暮らしを支えた動物たち』、2002年に『江戸・東京農業名所めぐり』を農山漁村文化協会から出版した）。

大竹氏は、出版企画を通じ、さまざまな資料を読み込んだが、その際にわかったことは、かつての江戸は「農業のハブ都市」としての役割を



写真2 1992年に出版した書籍『江戸・東京ゆかりの野菜と花』など



写真3 江戸東京・伝統野菜研究会代表の大竹道茂氏

担っていたことであった。

それは、参勤交代制度によって地方と江戸を定期的に往復していた人々が、江戸でも故郷のなじみの野菜が食べられるようにと様々な種子を持ち込み、下屋敷などで栽培していたためである。そして、これらの種子が周辺地域に広がり、江戸の種屋でも販売されるようになった。

また、江戸から地方に戻る時には、様々な種子を持ち帰り、他の地方の農産物を自らの地域で栽培した。このため江戸には全国から野菜の種子が集まると同時に、品質のよい野菜の種子が地方に送り出されるという役割を担っていたのである。この事實は、江戸東京の農業が歴史的にいかに重要であったかを再認識することにもなった。

## 「江戸・東京の農業屋外説明板」の設置

JA 東京中央会が出版の次に取り組んだことは、「江戸・東京の農業屋外説明板」（以下、農業説明板）の設置である。この設置事業は農業協同組合法施行50周年（1997年）を記念して実施され、JA 東京中央会では多くの人々に「立ち止まって見てほしい」「感じてほしい」という思いから、農業が神事と密接な関係がある神社に設置することを考え、東京都神社庁に相談し、その協力を得て、都内50か所の神社境内等に設置することになった。

農業説明板は、参拝に訪れた多くの人々が伝統野菜に思いを巡らせるだけでなく、町おこしの一環として栽培しようという行動を促す起爆剤となった。

たとえば、亀戸大根の農業説明板が設置された香取神社では、地元の商店街の人々が農業説明板を見たことがきっかけとなり、亀戸大根が地元の小・中学校で栽培されるようになった。



写真4 花園神社にある農業説明板（内藤トウガラシとカボチャ）

小・中学校に加え、農家で栽培・収穫された亀戸大根は、毎年3月に香取神社で開催される亀戸大根収穫祭と福分けまつりで市民に配られている。注目されるのは、これらのイベントがすでに20年以上も続き、地域文化として根付いていることである。

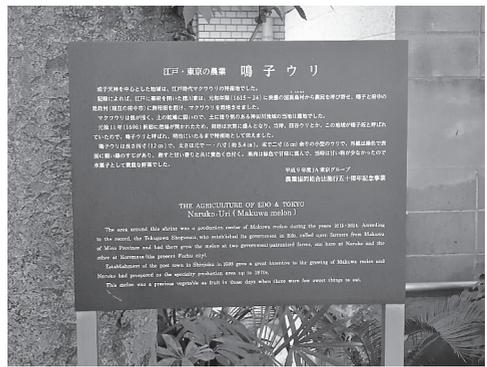


写真5 鳴子天神社にある農業説明板（鳴子ウリ）

亀戸以外にも、農業説明板がきっかけとなって地元の小・

中学校から江戸東京野菜が復活したケースには、品川かぶ、寺島なす、砂村三寸ニンジン、砂村一本ネギ、青茎三河烏菜などがある。

## 江戸東京野菜推進委員会の設立

大竹氏は、JA 東京中央会を退職後、東京都信連や東京都農林水産振興財団などの勤務を経て、現在は有志とともに江戸東京・伝統野菜研究会を立ち上げ、江戸東京野菜の発掘、普及に取り組んでいる。

ただ、江戸東京野菜の認知度を高めるためには、有志による活動では限界があるので、大竹氏は、JA 東京中央会に要請し、江戸東京野菜のブランド化の推進と江戸東京野菜を認定する機関として「江戸東京野菜推進委員会」を組織することにした。

ここでいう「江戸東京野菜」とは、JA 東京中央会によれば「江戸期から始まる東京の野菜文化を継承するとともに、種苗の大半が自給または、近隣の種苗商により確保されていた昭和中期（昭和40年頃）までのいわゆる在来種、または在来の栽培方法に由来する野菜のこと」であり、F1の種子は江戸東京野菜と認められない。

また、江戸野菜ではなく江戸東京野菜という名称を用いることにした理由は、①江戸時代から、東京となった明治、大正、昭和という時代に生産されたという「時代としての江戸東京」と、②江戸の都から多摩地

域や島嶼地域を含めた現在の行政地域で農業振興を行っているという「農業振興地域の江戸東京」という思いが込められている（江戸時代の野菜（江戸野菜）は日本中に存在する）。

JA 東京中央会内に事務局を置く江戸東京野菜推進委員会（2010年に設立、2011年7月に江戸東京野菜が商標登録される）は、東京都職員、JAグループ東京役職員、農家代表、弁理士などで構成されており、江戸東京野菜に認定されている野菜は50品目にのぼっている。また、2019年には、江戸東京野菜普及推進室を設置したことを受け、東京都から普及推進予算を受け入れている。

## 足立区立保木間小学校における「命をつなぐ 千住ネギ栽培授業」

ここでは、足立区内の小学校で種子が受け継がれている江戸東京野菜・千住ネギの授業を紹介する。

東京都足立区では、2015年から区内の小学校で千住ネギの栽培が行われている<sup>\*1</sup>。千住ネギの歴史は、16世紀後半に大坂（大阪）から砂村（現在の江東区東部）に入植した農民がネギを栽培したのが始まりといわれている。大坂ではネギの葉の部分（葉身）を食べていたが、大坂よりも

気温が低い江戸で栽培されたネギは、霜枯れのように葉の部分がうまく育たなかった。そこで江戸では、土寄せが行われ、白い部分（葉鞘）を成長させて食べられるようになったという。砂村で栽培されたネギは、その後、現在の足立区や葛飾区でも栽培されるようになり、千住ネギとなった。

足立区農業委員会会長の荒堀安行氏によると、1950年代の足立区はネギ



写真6 足立区立保木間小学校

畑が広がっており、千住ネギとして出荷されていたという。

ただ千住ネギは、加熱すると甘みがあるものの、身が柔らかいので扱いにくく、ネギ坊主の出る時期が早いため出荷期間が短いという特徴がある。

また、60～70年代にかけては足立区も都市化の波を受け、多くの農地が宅地へと変化ようになって、千住ネギが栽培されなくなった。

しかし、伝統野菜復活の取組みを聞きつけた学校関係者が、教育の一環として千住ネギを栽培したいと、2015年に足立区内の栗原北小学校、千寿双葉小学

校、平野小学校でスタートし、2018年には西伊興小学校、2019年には保木間小学校にも広がった（種子は、2015年に国立研究開発法人農業生産資源研究所のジーンバンクから譲り受けた固定種「千住一本太」を使用）。

筆者は6月下旬、保木間小学校で開催された「種の伝達式」と「ネギの種まき実習」に参加した。伝達式では、千住ネギの栽培を体験した5年生が4年生に千住ネギの種子を袋に入れて手渡すが、その袋には一袋



写真7 千住ネギの種の伝達式



写真8 足立区農業委員会会長の荒堀安行氏

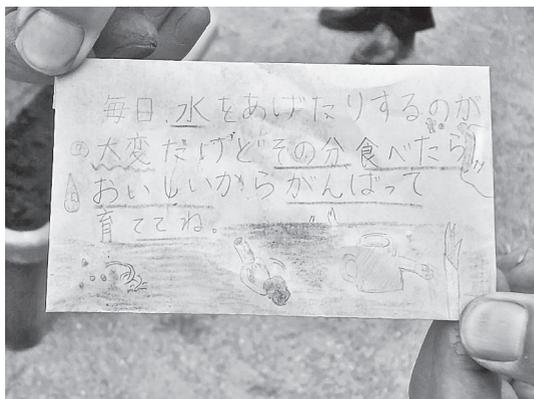


写真9 上級生から下級生への種子をつなぐメッセージ



写真10 千住ネギの種まき実習

ごとに下級生へのメッセージが記されている。また、実習にあたって、荒堀氏や大竹氏が千住ネギの由来や栽培のポイントの説明をするのに加え、異口同音に「命をつないでほしい」と約50人の児童に訴えていた。

千住ネギの栽培は、5人の足立区農業委員の指導の下、ネギが30cm程度に成長する9月頃に花壇に定植し、その後、数回の土寄せを行い、翌年の1月下旬から2月中旬に収穫される。収穫作業後は調理実習で試食したり、自宅に持ち帰って家族とともに伝統野菜を味わったりすることで江戸東京野菜のおいしさを体験してもらう。

保木間小学校校長の巻島正之氏は、足立区農業委員会に栽培授業を要請した理由について、足立区の伝統文化を大切するとともに、「国語、算数だけではない学びがある。体験してほしい」という思いがあったという。保木間小学校は住宅や商業施設が密集している地域にあり、農産物が育つ風景をまじかに見ることは難しい。そのため、次世代を担う子供たちが伝統野菜の栽培を通じて農業を学ぶことの意義は計り知れず、

足立区もこの取組みに期待を寄せている。

※1 千住ネギの歴史や足立区における千住ネギ栽培授業の取組みについては、足立区ウェブサイトを参照している。

## 期待が寄せられている江戸東京野菜

以上、JA 東京中央会における江戸東京野菜の取組みをまとめてみた。「伝統野菜の種子がなくなっていく」という危機感のもと、JA 東京中央会は出版事業や農業説明板を設置することで情報発信をし、これに触発された地域の人々は、小学校の授業で江戸東京野菜の栽培に取り組んだり、



写真11 JA 東京中央会江戸東京野菜普及推進室の水口均氏

り、イベントが開催されたりするなど、町おこしの一環としても復活するようになった。

さらに、JA あきがわの「五日市のらぼう部会」では、山間部でのらぼう菜の採種を厳重に管理し、JA 東京みどりでは、農家リーダーによる江戸東京野菜生産グループが結成された。また、JA 東京あおばでは、練馬大根を小学生に食べさせようという思いから「練馬大根ひっこ抜き競技大会」を開催し、同大会は10数年も継続している。

このような多くの人々の継続的な努力によって、江戸東京野菜が注目されるようになり、JA 東京中央会江戸東京野菜推進室の水口均氏によると、デパートの食品売り場などでは人気商品にもなっているという。また同推進室では、揃いが悪いことから流通に乗らなくなった江戸東京野菜を都外で売るのではなく、東京に来て食べていただく、“東京のおもてなし食材”と考えており、東京オリンピック等で利用しようと、レストランや、和食割烹などからも大きな期待が寄せられている。